

コメント…維新の〈神話〉と進化論

評者はこれまで、政治史・対外関係（に関わる世界認識）を主として扱ってきたとおり、今回コメントを命ぜられた各報告者の扱う王道の思想史は（少なからぬ関心と自覚的には一定の関わりを有してはきたものの）専門外であり、緻密な指摘はなし得ないし、また当初から求められてもいないであろう。そこで以下では、いささか大仰なスパンで明治維新ならびにその結果成立した近代日本の特質を、構造分析の観点を見してきた身として、今回の各報告が幕末からの展開のもとに立ち上がってきた明治国家の国是やナショナルアイデンティティとの絡みにおいて、いかなる刺激と意味をもったのか、多少の私見とそれに付随する問いを発することで課せられた責務への

奈良 勝司

応答としたい。^①

なお、評者の力不足・準備不足により、本コメントは近年大会報告に関わる博士論文を刊行された三人の報告者の専論たる著作を精読し、それに厳格に対応したかたちにはなっていない（なれていない）。本稿はあくまで、主として当日の各発表の下準備として事前に用意されたペーパーにもとづき、上述の各著作をかいつまんで参照した評者の理解・関心を土台としており、この点あらかじめお断りして海容を乞う次第である。

まずゴダール報告は、スムーズな受容という通念とは裏腹に、二〇世紀以降宗教界等で進化論の拒絶や合理化

の苦闘が重ねられたことを明らかにし、キリスト教の創造主神話とは別次元での進化論と近代日本の緊張関係を示した点が新鮮であった。「ダーウインによる世界の脱魔術化と感じられたものは、世界の他のどこよりも、日本でこそ大きな脅威となった」(一〇頁。事前レジュメの頁数、以下同)との指摘は示唆に富む。

その上で評者が気になったのは、①近代日本の土台をなし、解体されてはまずかった中核理念¹⁾「魔術」の具体的内容、そして②一九世紀後半までとの対応の差はなぜ生じたのか、の二点である。①に対する一般的な答えは、王政復古理念であろう。政治や社会のあらゆる領域に及ぶラディカルな変革を「神武創業」への「復古」と位置づけ、改革が保守理念で正当化された「御一新」の構図は、「万世一系」という不変性を至高の価値とする理解に支えられていた。ならば、変わらぬことを価値ではなく退化と考え、そもそも不可能とみなす進化論は、近代日本の建国神話の検証に向かえばゆゆしき事態を招来する。こう考えれば、「日本の思想変化に顕著なのは、生物学の社会学への応用ではなく、社会・政治的な理念の、自然への送り込みである」(一〇頁)との指摘は核心を衝いている。

ただ、そうになると②はどう解釈すべきか。氏は「日本

の進化に対する宗教的なかかわり方は、まずもって、一九世紀後半の全面的かつ熱狂的な取り込みから始まる。

そして二〇世紀初期から、次第に二極化や懐疑的な態度の方へと向かった」(八頁)と述べ、進化論への対応は不信・拒絶からの理解・受容ではなく、むしろその逆であったと指摘する。確かに話を西洋化一般に広げても、幕末維新期にこれをあくまで拒絶したのは大橋訥庵・佐田介石・神風連の党与など少数に留まり、あくまで例外であった。氏が触れた佐々木高行ら(六頁)にせよ、進化論への懐疑を訴えた史料は二〇世紀以降(一九〇七年など)のものであり、佐々木は明治初期には、西洋化一般に関してではあるが、好みはしないがやむを得ないと述べていた²⁾。しかし、これは率直に言って奇妙なことではなからうか。

当初は歓迎したものの、実態がわかるにつれ問題を意識したという解釈も可能だが、それにしても(進化論が日本社会に本格的に浸透した明治十年代からの)約三十年の歳月は、やや長すぎるようにも思える。私見では、この問題は排外主義のエネルギーを国内変革の動力へと転化させた明治維新のあり方¹⁾政治要因と切り離して考えることはできない。すなわち、幕末の攘夷論が、西洋化を通じた軍備増強²⁾仮想敵の模倣による、長期計画での西洋

のキャッチアップへとアクロバティックに展開（転回）した³ことが、維新直後における自己変革の正当化の文脈で進化論と親和性を持ったのではと考えている。そのため、日露戦争に勝利すると、上記の長期計画が曲がりなりに達成されたがゆえに、紐付きで邁進してきた西洋化の見直し・再検討の機運が沸き起こる。それに加え、アカデミズムなどの領域で進化論理解が深まったことが、ナショナルアイデンティティの根幹への抵触をきたし、具体的側面における利用の恩恵と世界観次元での危険性をめぐって、位置づけや扱いの葛藤・分裂を引き起こしたと展望するのだが、発表者としてはどうだろうか。

田中報告は、転向者・保守派の印象の強い加藤弘之に関して、その思想の展開を進化という観念を軸とした主体的な営為として読み直そうとしたものであった。考えてみれば当然かもしれないが、たとえ加藤の軌跡が天賦人權説にもとづく国家権力との対決姿勢からは外れていったからといって、彼が体制との一体化に安穩と自足していたことにはならない。その観点に立てば、『人權新説』前後の推移をとりたてて断絶とはみなさない捉え方は興味深い。また、「明治憲法において天皇主権が明記され、統治の正統性が「神勅」に求められると、社会進

化論に基づいた国家思想は変容しはじめます。統治の正統性が、あくまで権利をめぐる生存競争に打ち勝ち、国家を創始したという点に求められたからです。その変容課程で、加藤の国家思想は、社会有機体説をはじめ様々な理論や「道徳法律」といった要素を取り込みながら複雑な相貌を呈することになりました」（二二頁）との指摘は、進化論が（便利な利用のツール）に留まらず、整備された国家の正統性とのあいだで緊張感を帯び始めた段階における、彼の苦闘・試行錯誤の指摘として重要であろう。また、西洋列強のキャッチアップに貢献する（細胞）としての役割から（その当初の目的が半ば達成されたことにより皮肉にも）解放されてしまった、新世代にあたる煩悶青年たちが二〇世紀初頭にみせた振る舞いを、加藤が許容できなかった点も大変辛辣的に感じた。

ただしそうなると、加藤の歩みは権力や時勢への追従とは片づけられない真摯なものであったにせよ、その内実は全き個に即した世界との対峙ではなく、帝大総長に象徴されるような社会的立場とも相まって、現実に対処しそれを内面化する試みであったともいえないか。もしそうなら、その言説は現実社会に生きる自己と周囲を当説明する機能は有したかもしれないが、他者を鼓舞し未来に投企する思想としての力はどうか⁴だったのか。

現状が生存競争での勝利の結果だとしたら、これから生じるいかなる変化も原理的には拒絶できないのではないか。発表を聞いた評者の素朴な感想は、加藤は進化論に〈基づいていた〉というよりは、進化論という西洋近代の学知へで説明することに拘った〉のではないか、というものであった。彼の帯びた「複雑な相貌」への気づきが、より広範な明治国家論との関わりにおいてどこに帰着するのか、興味深く感じた次第である。

李セボン報告は、田中報告とは逆に中村正直の進化論への〈冷淡さ〉を説いたもので、かつて自分でもささやかながら幕末の中村を検討したことのある身としては、これまた興味深かった。一般的には洋学者と捉えられることの多い中村について、あくまで儒学者としての思考が土台にあったことへの注意が喚起されるが、評者も全く同感である。幕末のイギリス留学時のエピソードが示唆するように、中村は儒学を洋学などと同格の一思想というよりは、諸思想の受け皿となるプラットフォームのように位置づけていたのだが、その点をふまえると、キリスト教への評価も信仰や道徳自体というよりは目的に即した最適な手段としての側面が強かったとする論旨には、確かな説得力を感じた。

その上で評者がこだわりたいのは、中村が儒学に影響されて形作っていた世界観の具体像である。中村に限らず、明治以降に漢学として洋学・国学と並列化される前の儒学は、一つの思想であると同時に諸思想の土台をなす〈思考の型〉でもあったが、ゆえにそこにはかなりの多様性があり、朱子学に限っても政治態度としては攘夷論も開国論も、保守主義も合理主義も存在した（会沢正志斎も横井小楠も古賀侗庵も大橋訥庵もみな朱子学者である）。その点で、評者は中村が対外姿勢の点で古賀侗庵に通ずる積極開国論を抱き、自己を徳川政権Ⅱ国家主権者へと強固に一体化させていたことを重視したい。中村は幕臣時代の元治元年（一八六四）九月、幕閣に宛てた上書の中で「攘夷の勅有之候といへとも、異船見懸次第打払候様なる、無礼・無義・無謀・無策の挙動を致し候て相済可申哉」「攘夷・拒絶等の万々不可行事を申候ものハ、愚にあらされハ奸なる事ハ明白ニ御座候」と述べて、前年来政局を席卷していた攘夷論を痛烈に批判した。そして「大膳父子、尊王攘夷の四字を盗弄し、大逆無道を企て候事、罪状明白に候」とその牽引者であった長州藩を咎め、「速かに征伐を被為遂、国郡を総て没収候様仕度義二奉存候、若シ一・二の諸侯にて彼説を正議抔と唱へ、此上にも猶寛裕の御処置と申し候ハ、党患のもの共に

有之候間、嚴重の御沙汰被為在度義ニ御座候」と長州征伐を強く訴えた。そしてこうした認識の背景にあったのは、「天下の事務ハ公辺に御委任の上ハ、開くべくして開き、鎖すべくして鎖し、和すべくして和し、戦ふべくして戦ふ、臨機応変の御処置当然の御事ニ御座候間、諸藩より異論申張り候筋にハ有之間敷」という、国家主権者としての矜持であつた。⁶⁾

先述のごとく、進化論受容の効用に、長期計画化した攘夷の自己変革性(克服のために仮想敵とまず同化するというわかりにくさ、節操のなさ)を説明できることがあつたとすれば、攘夷を真つ向から否定した積極開国論者にはその必要性は生じ得ない。中村がスペンサーの著作に実は精通しながら進化論への興味と言及をほとんど残さなかつたという氏の指摘を聞いた時、評者の脳裏に真つ先に浮かんだのはこの点である。

ただ、そうであれば、氏が中村に付した「徳川日本の秩序を排し」(五頁)という評価は一定の留保が必要なようにも思われる。確かに、世襲身分制の伝統に関してはそうだったかもしれない。しかし、そもそも中村自身のキャリアが身分制のむしろ枠外において形づくられていたことに加え、彼が福沢諭吉にも勝る強度で長州征伐を支持し、徳川政権Ⅱ日本政府に自己を重ねていたことは、

政治面でも明治維新を越えて彼の世界観を規定し続けたというのが評者の考えである。また、先述した儒学者の多様性や、「当今列国争雄の世に右様の所業をなして、両間に列し国土保たれ申すへきや、通商・和親を致不申候てハ、彼の長技を取るも交る上にあり、彼の事情を知るも交る上にあり、以夷攻夷の計を行ふも交る上にあり、彼の国を并吞するも交る上にあり」という国際情勢認識も踏まえれば、朝鮮や中国の儒学者との相違も、国際環境の苛烈さの度合いがそのまま反映したとみるよりは、攘夷派や進化論受容者も珍しくなかつたであろう儒学者のなかで、中村が独自の個性として形作つた世界観の構造を精緻に検討すべきと考えるが、如何だろうか。

最後に全体を通しては、改めて二〇世紀初頭、別の言い方をすれば日露戦後という時期がもつた意味というものを考えさせられた。ゴダール報告は、明治初年に進化論受容に雪崩をうつつた宗教界が、約三十年もの時を経てから、拒絶・合理化への努力など、新たにその消化をめぐる多様な葛藤を示したことを示唆した。田中報告は、明治初年における加藤弘之の「転向」は実は優勝劣敗思想に即した国家観としてみれば断絶ではなく、しかしそれは明治憲法制定以降現実の推移のなかで絶えず変容を

迫られ、日露戦後に国家への奉仕に回収され切らない煩悶青年（「立身出世」と距離をおく「高等遊民」）が登場すると、これに拒否反応を示す流れを明らかにした。李セボン報告は、実は幕末段階では徳川強硬派の系譜に属し、新政府の政治潮流からの疎外者として明治の世を歩みだした中村正直にとって、逆に進化論は当初から琴線に触れることのない、いわば無価値なものともなされてきた可能性を示した。進化論という変化を宿命視する理論が、幕末以来の排外主義を昇華させた政治・社会改革が一気に進められた明治初年には宗教者を含めラディカルに受容されながら、近代国家としてのナラティブが制度化しそれゆえに神話化していく明治中期以降には危険な存在へと転じ、維新当初からの国是（西洋^{II}仮想敵の模倣によるそのキャッチアップ）が曲がりなりにも達成された日露戦後には宗教者や思想家のあいだで動揺と新たな対応の必要性が生じるという展開は、明治維新の（なされ方）がその後に成立した近代日本に刻み込んだステイグマの現れであったと、理解できはしないか。

注

(1) これは、思想家や知識人が思想展開の際に否応な

く影響を受ける政治的社会的環境の要素を、近代日本がその出発点において抱え込んだ問題構造と評者が考える次元にまで掘り下げるかたちで、全体的な傾向やバイアスを捉えようとする試みである。

(2) 『保古飛呂比 佐々木高行日記』四（東京大学出版会、一九七三年）一四〇頁。「外国人二皇城ノ庭内迄見七候事」に関してではあるが、「自分共頑固生毛最早今日ハ御外交上致方ナシト考ヘタリ、向來頑固人開化人ト如何相成候哉ト懸念ス」と述べている。

(3) 攘夷論の研究はすでに一定の蓄積がある。評者のものでは、拙著『明治維新をとらえ直す』（有志舎、二〇一八年）、拙稿「条約勅許・万国公法・大攘夷——条約勅許後の対外関係の構想と展開」（『明治維新史研究』第一七号、二〇一九年）等を参照。

(4) 報告者は加藤の進化論に即した思想展開もった政府権力の公式見解との緊張関係を、基本的には潜在的なもの、可能性として捉えている印象を受けたが、伊藤ら政府領袖の不平とは別に、具体的に両者が衝突した例などほどの程度あったのだろうか。

(5) 拙著『明治維新と世界認識体系』（有志舎、二〇一〇年）第一章「変通」下の儒教普遍主義——古賀侗庵の「世界認識体系」中の第四節「幕末維新时期に向けた「潮流化」」の2項「中村正直」（四三〜四五頁）。同四

六〇五三頁も参照。

(6) 以上、水野家文書 A10-160 (東京都立大学図書館所蔵)。前掲拙著『明治維新と世界認識体系』二九七―二九八頁も参照。当時中村が著名な開国派として攘夷論者に天誅予告を受けていたこと、またそれゆえ彼のイギリス留学も、開国派で徳川強硬派の頭目の一人でもあった小栗忠順の助け舟によるものであったらしいことも、あわせて指摘しておく。

(7) 中村は学者の家系ではなく、自己の学問の才覚によって昌平黌に地歩を築いていた。

(8) 前掲、中村正直上書(注(6)参照)。

*本稿の元となった大会時のコメントに際しては、佐藤太久磨、藤野真拳両氏に知見を賜った。附して謝したい。また、本稿はJSPS科研費21K00852の助成を受けている。

(広島大学准教授)